

オックスフォード大学
REES センター

里親養育が里親養育者の子どもに与える影響

国際的な文献レビュー

イングリッド・ホイヤー、ジュディ・セツバ、ニッキー・ルーク

謝辞

初期の草稿に寄せられた、Estella Abraham、Alison Alexander、Prof Jason Brown、Dr Cinzia Canali、Wayne Ferguson、Dr Nuria Fuentes-Paláez、Harvey Gallagher、Dr Sara McLean (Prof Leah Bromfield の代理)、Sally Melbourne、Mark Rogers、Prof Ian Sinclair、Robert Tapsfield、Dr Tiziano Vecchiato、Frank Ward、Machiko Yamamoto からいただいたコメントに感謝します。また、意見・感想を寄せていただいた里親養育者の方々 (Crystal Coad, Jenny Harris, Chris Massey, Julie Quin, Mike Wilson and Theresa Winnard) ならびに里親養育した家族の感想を寄せていただいた方 (Harry Edworthy) にも感謝しています。

最終的な文書の責任は著者にある。

Rees Centre for Research in Fostering and Education (リース里親養育および教育研究センター) は、国際的な子どもへのサービス提供者である Core Assets グループの支援を受けており、英国および国際的な里親養育サービスに特に関心を持っている。センターの研究課題は、Core Assets をはじめとする英国内外の主要なステークホルダーと協議しながら進められる。これらの利害関係者には、子どもとその里親養育者、ソーシャルワーカー、地方自治体、公的セクターと独立セクターの管理者が含まれる。実施された研究とその出版は、大学の倫理プロセスによって管理され、特定の利害関係団体や資金提供者から独立して行われる。

献辞

リースセンターの出版物には、通常献辞を記述しない。しかし、自分自身が養育を受けた経験がある私たちのアドバイザーの一人は、この出版物は隠れた資産として認識され、その無私な精神が報われるべき里親養育者の子どもたちに捧げるべきだと提案した。彼らは様々な方法で与える側であるが、時には最も困難な行動の最終的な受け手になることもある。その後、多くの人が自分自身も里親養育者になる。今回の出版をきっかけに、彼らの貢献がより広く認知されることを願うものである。

Ingrid Höjer, Judy Sebba and Nikki Luke

オックスフォード大学リース里親養育および教育研究センター
2013年10月

© 2013 REES CENTRE. 無断転載禁止

ISBN978-0-9576782-6-2

eISBN 978-0-9576782-7-9

本報告書は早稲田大学社会的養育研究所がオックスフォード大学 Judy Sebba 教授から許可を得て、原著 *The impact of fostering on foster carers' children. An international literature review* (2013) を日本語訳したものです。

日本語訳作成をご快諾いただいた Judy Sebba 教授、監訳チームで本論文を担当された当研究所の中村豪志氏、そして本事業に助成していただいた日本財団に心より感謝申し上げます。

早稲田大学社会的養育研究所
所長 上鹿渡和宏

目次

要旨.....	4
主な知見.....	5
政策と実践のための提言.....	7
今後の研究のための提言.....	8
レビューの背景.....	9
目的と範囲.....	10
方法論.....	10
研究状況.....	11
主な知見.....	12
研究のギャップ.....	24
現在のエビデンス基盤の限界.....	25
結論.....	26
政策と実践のための提言.....	28
研究のための提言.....	29
参考文献.....	30
付録.....	32

要旨

ある家族が里親養育する家族への変化を経験すると、家族関係と一般的な家族生活にも様々な変化が起こる。

里親養育をするのは家族全員であり、養育者の子どもが里親養育の仕事に関与することを認めるべきである (Martin, 1993)。里親養育者の多くは、里親養育が子どもに与える影響を心配しているというエビデンスがある (Poland and Groze, 1993)。里親養育者に同居する子どもがいる場合、措置解除のリスクが高まるというエビデンスがいくつかあるが (Berridge and Cleaver, 1987; Cautley, 1980; Kalland and Sinkkonen, 2001; Quinton ら, 1998)、相反するエビデンスもある (Farmer ら, 2004; Sinclair, Wilson and Gibbs, 2005 など)。それにもかかわらず、里親養育が里親養育者の子どもの人生に与える影響は、研究でも実践でもほとんど見落とされており、国際的な関心事となっている (Höjer, 2007; Part, 1993; Poland and Groze, 1993; Twigg and Swan, 2007; Watson and Jones, 2002)。

このレビューは、里親養育者の子どもに対する里親養育の影響に関する国際的な研究をまとめたもので、家族が里親養育する際に里親養育者の子どもに対して、より効果的に準備や支援する方法を明らかにすることを目的としている。主な検討課題は以下の通り。

- 里親養育者の子どもは、里親養育家庭での生活に向けてどのような準備をしているのか？
- 里子の存在が、里親養育者の子どもに与える影響とは？

電子データベースとウェブサイトを利用して、英国、米国、カナダ、スウェーデン、ベルギー、スペインの 17 件の研究を特定した。

国をまたいで比較は、文化やサービスの違いによる制約がある。レビューの対象となった研究は、1990 年以降に発表されたもので、里親養育者の子どもの経験についての詳細が含まれていた。これらの研究では、インデプスインタビューやフォーカスグループから、アンケートを用いた大規模な調査まで、さまざまな方法論が用いられている。このレビューでは、親族養育者の子どもたちや、養父母の子どもたちの経験については触れていない。

ほとんどの研究は定性的なもので、里親養育者の子どもの里親養育体験についての見解は興味深いものがあったが、成果についてのしっかりとした評価はなかった。研究サンプルは比較的小さく（ほとんどが 20 人以下）、一般化の可能性は限られている。ほとんどの研究では、過去に経験した里親養育の影響について、里親養育者やその子どもの視点を求めるレトロスペクティブ（後ろ向き）な手法を採用している。このレビューでは、比較群や対照群を用いて評価された里親養育者の子どもの準備や支援を目的とした介入について報告した研究はなかった。

主な知見

里子と里親養育者の子どもはそれぞれ個人であり、その性格は里親養育がどのように経験されるかや、両者の関係に影響を与える。しかし、里親養育者の子どもへの影響に関する国際的な研究のレビューから、いくつかの明確なメッセージが浮かび上がってきた。

• 里親養育の決定に関わったことで、その後の適応力が高まる

里親になるかどうかの決定に参加することの重要性は、多くの研究での主要な知見である。里親養育者の家族の子どもや若者は、里親になる決定に関する家族の話し合いに参加する必要がある、家族の中で重要性の低い、受動的なメンバーと見なされてはならない。このレビューのエビデンスは、里親養育が彼らの生活に影響を与えることを示唆しており、彼らはどのように、どのような形で影響を受けるかを理解する必要がある。

• 里親養育について、またそれぞれの子どもについての情報を得ることで、衝突を減らすことができる
家族が里親になることを決断したとき、子どもや若者も同様に、里親養育の性質（良い面と悪い面の両方）について説明を受ける必要がある。いくつかの研究では、里親養育者の子どもは、ピアサポートグループが彼らに情報を提供する良い方法であると示唆しており、いくつかのフォスターリング機関がこのようなグループを運営しているが、しっかりとした評価は行われていない。例えば、英国の The Fostering Network は、このグループに特化した雑誌（「Thrive」）などを作成したり、彼らの貢献を称えるキャンペーン活動を行っている。他の国でも同じような制度があるかもしれない。しかし、このような活動が評価されなければ、子どもたちの成果にどのような影響を与えているかは不明である。

情報は、里親養育の初期段階だけでなく、里親養育の全過程において重要である。里親養育者と同様に子どもや若者も特定の里子が家族に加わる前にその情報を知る必要がある。そのような情報は、彼らの理解や困難な行動への対処を容易にし、子どもらは自分らが関与しており、遂行能力があり、そのプロセスの一部であると感じられるようにする。これは、ソーシャルワーカーや里親養育候補者への重要なメッセージである。里親養育者の子どもがその果たす役割を認識し、彼らへ適切な情報を提供することが必要である。関連情報を受け取った子どもや若者は、里子との関係が格段に改善されたことが明らかになった。

• 里親養育者は自身の子どものために「守られた」時間を見つける必要がある

多くの研究では、子どもや若者は、両親が里親養育の仕事に広く関わっていることを示唆していた。彼らは、両親が自分たちと一緒に過ごす時間が十分ではなく、里親養育が原因で十分な話を聞くことができなかったと述べている。時には、家族の中で排除されているような気がする、親から忘れられているような気がする、と子どもや若者が言うこともあった。彼らは、里親養育という仕事の重要性を認識し、両親が里子に十分な配慮をしなければならないことを認めていたが、それでも自分たちは取り残されていると感じることがある。

• 情報の制限およびセンシティブな情報

調査対象者の中には、「あまり多くの情報は欲しくない」という意見もあったが、これは特に若い子どもたちに多く見られた。参加者の中には、あまり関わりたくないという人もいたが、それは関わるということは責任を負うことでもあるからである。里親養育者の子どもたちと里親養育者自身が、子どもたちが虐待やネグレクト、暴力に関する情報を処理しなければならないことがあり、それは非常に困難なことだと示された研究例があった。

• 問題について話し合えること

里親養育者の子どもに関する調査から得られたその他の重要なメッセージは、里親養育が家族にもたらす日常生活の大きな変化を反映している。これらの変化には、ポジティブな面とネガティブな面がある。ネガティブな面の例としては、親との時間を共有するために親の注意を引くことができない、持ち物を共有したり、個人のスペースが狭くなったり、里子の難しい行動に対処したりしなければならないなどの可能性がある。中には里親になることのネガティブな面を恨んでいるという子どもや若者もいたが、多くの子どもや若者はうまく対処しているようであった。

対処能力を向上させる要因の一つは、主に両親やソーシャルワーカーとの間で、認識している困難についてオープンに話し合う機会があったことである。子どもや若者が里親養育の問題点を訴えることが許され、ネガティブな感情を表に出すことができるようになれば、問題に対処する能力が高まる。研究に参加した子どもや若者の中には、「自分は困っているが親に迷惑をかけたくない」という声や、「自分には苦情を言う資格がない」という考えを持っている者もいた。

• 措置が終了する際の里親養育者の子どもの準備

措置が終了する際にも、情報提供や家族全員での話し合いが重要になる。子どもや若者の中には、措置が終了することが里親養育の最も困難な側面であると述べている者もいた。里親養育者の子どもが、里子が家族のもとを離れたときに何も知らされず、悲しみや喪失感を認識してもらえなかったと感じている例がいくつかあった。

1 WWW.FOSTERING.NET/ALL-ABOUT-FOSTERING/SONS-DAUGHTERS

政策と実践のための提言

• 里親養育者の子どもを里親養育プロセスに参加させる

里親養育者は、里親養育を始めることについての話し合いや決定に、彼らの子どもがどのように関わることができるかを検討する必要がある。里親養育サービスは、彼らの声に耳を傾け、特に彼らが積極的な養育者として認識されるようにすることで、これを促進するべきである。

• 里親養育者の子どもに十分な情報を提供すること

里親養育サービスは、里親養育者の子どもへの情報提供とサポートを改善するために、現在の慣行を見直すべきである。里親養育提供者の中には、里親養育を始める家庭の子どもたちに一連の情報を提供したり、説明会を開いたりするところもあるが、これは一貫して行われておらず、評価もほとんどされていない。しかしながら、ソーシャルワーカーや里親養育者は、子どもや若者の話に耳を傾け、彼らがどのような情報を必要としているかを敏感に察知する必要がある。

• 里親養育者の子どもには継続的なサポートが必要

里親養育者の子どものためのサポートグループは、継続的な課題に対処できるようにするための重要な手段であり、これらのグループの利点は評価されるべきである。里親養育経験のある里親養育者の子どもたちは、これらのグループに重要な貢献をすることができる。

• 里親養育者とソーシャルワーカーは、里親養育者の子どもに困難について話し合う機会を与える必要がある

里親養育者の子どもは、(ソーシャルワーカーが進行役を務める必要があるかもしれないが) 主に両親との間で、そしてソーシャルワーカーやサポートワーカーと、認識している困難についてオープンに話し合う必要がある。このような機会は、子どもや若者が里親養育についての自分の気持ちを明らかにし、里子や里親養育に否定的な場合には受け入れてもらえるようにする必要がある。このようにオープンに話し合うことで、子どもや若者が自分の気持ちを理解し、対処しやすくなる。

• 里親養育者の子どものための親子の時間の確保

ソーシャルワーカーやサポートワーカーは、里親養育者が自分の子どもとだけ過ごす時間を確保できるようにサポートする必要があり、場合によっては里子のレスパイトを手配することもある。里親養育者に対する矛盾した要望は、この時間を確立しようとする過程で認識されなければならない。この時間がないと、里親養育者の子どもが孤立し、取り残されたように感じるという強いエビデンスがある。しかし、里子は里親養育者の子どもとは違う扱いを受けていると感ずることがあるので、子育ての時間のバランスをとることは、慎重に行わなければならない。

• トレーニングと専門的能力の開発

これらの意味合いとして、特に里親養育者や子どもの心配事に耳を傾けることの重要性は、ソーシャルワーカーや学校スタッフのトレーニングや専門的能力の開発に含まれる必要がある。

今後の研究のための提言

このレビューの研究は、一般的に定性的で小規模なものであり、里親養育者とその子どもの回顧的な認識に依存していた。そのため、今後の研究では、

- 里親養育者の子どもにとっての里親養育のメリットとリスクを明らかにしようとする、里親養育者の子どもの視点に関する大規模な研究を行うべきである。この研究は、いわばここでレビューした先行研究を基に、養育された子どもや里親養育家族の特徴や考え方（例えば、性別、障害、民族性、家族構成、ペアレンティングスタイルなど）を、里親養育者の定着、措置の安定性、里親養育者と子どもの教育的成果などの具体的な成果に結びつけるものである。
- 里親養育者の子どもにとっての養育のメリットを増やし、デメリットを減らすための介入の評価、例えば、一連の情報、サポートグループ、キャンペーンの提供、ソーシャルワーカーやサポートワーカーが里親養育プロセスにおけるこれらの子どもの役割を認識するために採用する特定の戦略などに関してである。
- 里親養育者の子どもが、自分の家族が里親養育することになる子どもや若者の準備段階で果たす役割や、里子や他の家族の養育者の子どもを手助けする役割を果たす可能性があることを対象とした介入に対する評価。
- 里親養育者の子どもを対象としたプロスペクティブ（前向き）な縦断的研究で、両親が里親養育について最初に話し合った時から、その後、家庭に迎えられた里子の経験までを追跡したもの。補完的な研究として、里親養育した家族の成人を対象として、より社会的でレジリエンスのある市民になっているかどうか、社会的養育や教育関係の仕事に就く割合が高いかどうか、自分自身が里親養育者になる割合はどうかなど、長期的な効果への反映について検討することもできるであろう。

本文

レビューの背景

以前は、子どもは養育の受け手であって、潜在的な養育者ではないと考えられていた (Brannen ら, 2000; James and Prout 1997)。最近では、子どもは積極的で有能な社会的存在であると考えられるようになり、家庭内や社会全体での社会的相互作用における子どもの貢献が認識されるようになってきている (Brannen ら, 2000 など)。Martin (1993) は、養育するのは家族全員であり、養育者の子どもが養育の仕事に関与することを認めるべきだと強調している。

家族が里親養育家族への変化を経験すると、家族関係や一般的な家族生活に多くの変化が生まれる。最初の段階では、その世帯に住む人々は、フォスタリング機関 (国際的にはさまざまな名称で知られている) によってアセスメントを受ける。このプロセスでは、里親養育者の候補は、パートナーとの関係、子どもとの関係、子育ての実践などについての質問に答えなければならない。候補者がまず最初に知りたがるのは、子どもの養育への措置、つまり、子どもごとに異なる、子どものこれまでの家庭生活、虐待やネグレクトの経験、子どもの個性やニーズに影響されたプロセスである (Höjer, 2001)。

また、家族はソーシャルワーカーの訪問を受け入れる必要があるが、自分で決めた時間に訪問するとは限らない。里親養育者と子どもという家族の全員が、里親養育という仕事の影響を受ける。Twigg (1994) は、里親養育制度の問題の多くは、里親養育家庭内の力関係に対する専門家の理解不足に起因すると指摘している。家族は、このような家族生活の変化 (Höjer, 2001) や、里子を知るための時間、ソーシャルワーカーや実親家族からの訪問、ミーティングへの参加などの準備ができていない可能性がある。Watson and Jones (2002) は、里親養育者の子どもは、親と同じようにトレーニングやサポートを必要としているとは考えられないと結論づけているが、他の研究者 (例えば、Walsh and Campbell, 2010) は、これらの子どもたちにもトレーニングが必要な可能性を指摘している。

里親養育者の多くは、里親養育が子どもに与える影響を懸念していることが明らかになっているが (Poland and Groze, 1993)、大多数は子どもからの好意的な反応を報告している。Höjer (2001) によると、366 人の里親養育者のうち 76% が、自分の子どもは里親養育という仕事に対して肯定的であると考えていたが、24% の里親養育者は、里親養育のために子どもを放置することがあると述べている。Sinclair, Wilson and Gibbs (2005) の報告によると、同様に里親養育者の 73% が、自分の子どもが里親養育に肯定的な反応を示していることがわかった。

また、里親養育者に子どもがいる場合、措置解除のリスクが高まるとする研究もある (Berridge and Cleaver, 1987; Cautley, 1980; Kalland and Sinkkonen, 2001; Quinton ら, 1998 など)。逆に、Farmer ら (2004) はこのようなケースを見いだしておらず、Sinclair, Wilson and Gibbs (2005) は、子どもが同居している養育者の方が、措置の中断率が低いと結論づけている。しかし、これらの家庭の里子は、家庭に里親養育者の子どもがいない家庭に置かれた里子よりも若く、「障害」も少なかった。それにもかかわらず、里親養育が里親養育者の子どもの人生に与える影響は、研究においても実践においても、ほとんど見過ごされてきた (Höjer, 2007; Part, 1993; Poland and Groze, 1993; Twigg and Swan, 2007; Walsh and Campbell, 2010; Watson and Jones, 2002)。

目的と範囲

この国際的な研究のレビューでは、里親養育者の子どもに対する里親養育の影響について取り上げている。また、親族養育者の子どもたちや、養父母の子どもたちの経験については触れていない。これは、里親養育が里親養育者の子どもにどのような影響を与え、どのようにすれば効果的なサポートができるかを理解するために行われたものである。主な検討課題は以下の通り。

- 里親養育者の子どもは、里親養育する家庭での生活に向けてどのような準備をしているのであろうか。
- 里子の存在が、里親養育者の子どもに与える影響とは？

方法論

このレビューでは、里親養育が里親養育者の子どもに与える影響について、国際的な文献から得られた知見をまとめている。Medline, PsycInfo, ERIC, British Education Index, Australian Education Index, Conference Proceedings Citation Index, Campbell and Cochrane Libraries, International Bibliography of Social Sciences, SCOPUS, Social Policy and Practice, Social Services Abstracts, Social Sciences Citation Index, ASSIAL など、多くの電子データベースを検索した。以下のサイトを検索した。EPPI, NFER, C4EO, SCIE, The Fostering Network, BAAF, NCB, NSPCC, Casey Family Programs, Joanna Briggs Institute, What Works Clearinghouse, Department for Education, Chapin Hall, Office of Planning, Research and Evaluation in Administration for Children and Families (USA) .

「foster care」、「foster parent*2」、「foster famil*」、「substitute famil*」、「family foster home」、「child* in care」、「looked after」、「looked-after」、「out-of-home care」など、国際的に使われているさまざまな里親養育関連の用語を検索した。検索に使用したキーワードは、「biological children」、「biological famil*」、「own children」、「own famil*」、「birth children」、「birth famil*」、「carer' s children」、「carer' s famil*」、「son*」、および「daughter*」などであった。

その後、電子検索で特定された論文のタイトルと抄録をスクリーニングし、1990 年以降に発表されたもののみを対象とした。最後に、電子検索で発見できなかった文献に関して教示を得るため、里親に関する様々な国際的な専門家にも連絡を取った。レビューは経験的な研究に限定されているが、論評的な論文からは背景、文脈、考察が得られた。特定の方法論に基づいてレビューを制限するのではなく、質の閾値を適用して（ジャーナルの審査基準に基づいて選択した方法論で判断した）、最低限の質に達した研究のみをレビューに含めるようにした。親族養育者や養子縁組のみを対象とした研究は除外した。

研究状況

特定した 20 件の研究論文は、17 の異なる研究を表していた。英語（およびスウェーデン語）以外の言語での検索ワードを使用していないため、ほとんどの記事は英語圏のものである（ただし、1 つはスペイン人の同僚の推薦による）。我々が情報を持っていない他の言語で書かれた研究論文の存在を否定できないことが、本研究の限界である。調査は以下の国で実施したが、文化などの背景が異なるため、知見の一部が転用できない可能性があることを認識する必要がある。

イギリス	10
アメリカ	2
カナダ	2
スウェーデン	1
ベルギー	1
スペイン	1

純粋に定量的なアプローチをとった研究が 4 件、インタビューやフォーカスグループを中心とした定性的な手法のみを用いた研究が 8 件、アンケートを中心とした定量的分析とインタビューの両方を含む混合手法を用いた研究が 5 件であった。定性的研究の多くはサンプル数が少なく、5 つの研究では参加者が 6～9 人しかいなかった。研究者によっては（例：Poland and Groze, 1993）、里親養育者の子どもを養育者自身と一緒に参加させているが、他の研究者（例：Höjer, 2007; Watson and Jones, 2002）は、里親養育者の子どもだけに焦点を当てているため、このグループから抽出したより多くのサンプルにアクセスしている。

さらに、2 つのリサーチレビュー（Thompson and McPherson, 2011; Twigg and Swan, 2007）を確認した。

研究の詳細は、付録の表 1 に記載されている。

2 レビューで*を使用すると、その接頭辞を持つすべての用語を同時に検索することができる。

主な知見

里親養育者の子どもは、里親養育する家庭での生活に向けてどのような準備をしているのであろうか。

里親養育の決定に里親養育者の子どもが参加すること

里親養育者になることを決めるときは、両親のどちらか、または両方が、他の里親養育者との交流、子どもへの愛情、地域社会への貢献など、さまざまな動機で決断している（例：Höjer, 2001; Sebba, 2012; Triseliotis ら, 2000）。Martin (1993) は、専門家と親が、里親養育するかどうかの判断に子どもを参加させる必要性を強調しており、この見解は他の研究でも共有されている（Fox, 2001; Höjer, 2007; Part, 1993; Swan, 2002; Spears and Cross, 2003）。しかし、里親養育者の子どもが里親養育するかどうかの判断にどの程度関与しているかは、検討した研究によって大きく異なっていた。Younes and Harp (2007) の研究では、子どもと里親養育者の全員が、里親養育者になるための話し合いに参加したことがあると述べている。Höjer and Nordenfors (2004, 2006) の大規模調査では、3分の2の子どもと若者が、親から里親養育を始めることを決める前に意見を求められたと答えており、決定に参加しなかったと明確に覚えているのは22%だけだった。

しかし、里親養育者と子どもの認識は必ずしも一致しない。Poland and Groze (1993) の研究では、里親養育者の90%が自分の子どもと里親養育について話し合ったことがあると答えているのに対し、里親養育者の子どもは64%しかそう答えていない。Martin (1993) は、養育者の子どもが自分たちの意見に耳を傾けてもらえていないと感じていることを明らかにし、Fox (2001) の研究では、子どもたちが常に決定から取り残されていると感じていることを明らかにし、Spears and Cross (2003, p. 40) では、家族が養育を始める前に子どもや若者が「家族以外の人と相談ができていない」と報告されている。Höjer and Nordenfors (2004, 2006) の研究の参加者の中には、両親が自分の意見を考慮してくれたかどうか疑っている参加者もいた。仮に自分たちが否定的であったとしても、両親は里親養育することを選択しただろうと考えていた。

*親に「大丈夫か」と聞かれ、「大丈夫じゃない」と答えましたが、親は気にしていませんでした。
(Höjer and Nordenfors, 2006, p. 155)*

里親養育をするかどうかの決定に子どもや若者が関与する程度は年齢によっても異なり、年長の子どもの方が意思決定に参加する傾向があった（Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Spears and Cross, 2003）。

里親養育の準備

子どもたちの認識に焦点を当てた研究の中には、この準備段階に問題があり、里親になるための準備をしたいという子どもたち自身のニーズが、必ずしも真剣に受け止められていないことを示したものがある（Martin, 1993）。Martin (1993) は、ある少年が、ソーシャルワーカーから「生活はあまり変わらない」、「新しいきょうだいできたようなものだ」と言われたと報告し、フォーカスグループの他のメンバーからは皮肉な笑いが起きたことを紹介している。それは彼らにとって、実際の経験とは違っていた。Fox (2001) は、里親養育者の子どもたちは情報を得られないと感じていると述べている。Spears and Cross (2003) の研究では、20人の若者のうち15人が「もっと準備がしたかった」と述べている。Younes and Harp (2007) の研究では、子どもも里親養育者も、里親養育は、準備段階で説明されていたこととはまったく違うものだったと述べている。

里親養育者の子どもが個々の里子に関する情報をどの程度受け取っていたかについては、研究によってばらつきがある。Younes and Harp の研究 (2007) では、決定がなされ家族が里親養育を始めようとした

とき、養育者の子どもは子どもが家族と一緒に住むようになることを知らされたと報告している。Höjer and Nordenfor (2004, 2006) の調査では、里親養育者の子どもの39%が、家族が里親養育を始める前に里子について十分な情報を得ていたと答えているが、33%はそうではないと感じている。重要なのは、里親養育を開始する前に情報を得ていた場合、子どもや若者は里子と良好な関係を築いていると答える可能性が高かったことである。対照的に、Fox (2001) の研究では、自分の家に引っ越してくる子どもや若者についてより多くの情報が必要だと感じており、Poland and Groze (1993) は、里親養育者の子どもは、ソーシャルワーカーから特定の里子の行動や、里親養育者になったことで家庭生活がどのように変化するかなど、より多くの情報を必要としていると結論づけている。

若者たちは、情報が保護因子にもなることを示唆している (Martin, 1993)。例えば、里子が性的虐待を受けていた場合、そのことを知らされたとしても、関連する情報がなければ養育者の子どもが対処できないことがよくあった。里親養育者の子どもが、里子たちに何が起こったかを知らされていれば、情報が開示されたときにどのように対応すればよいかを知ることができ、また、性化行動を理解することも容易になる。Pugh (1996) の研究に参加した里親養育者は、自分の子どもに里親養育について教育する責任があると考えていた。また、Pugh は、もっと情報が欲しいと思う子どもがいる一方で、情報が増えると責任が重くなると考えて、情報を欲しがらない子どももいることを明らかにした。

里子の存在が、里親養育者の子どもに与える影響とは？

文献レビューから浮かび上がってきた、里親養育者の子どもにとってのポジティブな経験とネガティブな経験の範囲を図1に要約する。

図1: 養育者の子どもに対する里親養育の影響：メリットと課題

メリット
<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族への感謝 ・ チームの一員であることの実感 ・ 友達を作る ・ 思いやりと共感力を高める ・ 他人の不幸を理解する ・ 責任の取り方を学ぶ
課題
<ul style="list-style-type: none"> ・ 持ち物、空間、親との時間の共有 ・ 行動面での問題：例：盗み、嘘をつく ・ 無邪気さの喪失 ・ 責任と心配 ・ 自分の問題を親に話さない ・ 守秘義務 ・ 措置終了への対応 ・ 親の期待－行動 ・ 保護者の負担軽減－責任

家族に感謝し、チームの一員であることを実感し、友人を作ることができる。

Part (1993) の研究に参加した養育者の子どもは、仲間とのふれあい (43%)、乳幼児の世話 (24%)、お手伝いすることへの挑戦 (15%) が里親養育の一番の楽しみだと報告している。

彼らはいつも面白くて、私を笑わせてくれます。つながりが増えるので、たくさんのきょうだいといふことが好きです。(Part, 1993, p.27)

Sutton and Stack (2013) は、6人の参加者全員が里親養育チームの一員であると感じていたと報告している。彼らは、自分たちが家族の一員として積極的に行動し、起こっていることに影響を与えることができると考えていた。このような参加意識は、里親養育者と子どもたちが明確かつ正直にコミュニケーションをとることができることに由来している。里親養育者の子どもは、里親養育のプロセスを自分のものとし、その成功や失敗に自分が重要な役割を果たしていると考えており、ポジティブな成果が得られたときには、それを誇りに感じると報告している。

子どもがどれだけ変わったかなどの違いを目の当たりにすると、とても気分がいいものです。なぜなら、ジョン(里子)が当時どのようなようであったか、そして彼が今どのようなようであるかを考え、そして彼がここに来なかったら彼がどのようなようになったかを考えると、私はそれには大きな意味があると思うからです。(Sutton and Stack, 2013, p.8)

Swan (2002, p.15) は、彼女の研究に参加した若者たちが10代半ばに達したとき、里親養育プロセスにおいて「対等で支援的なパートナーになることへの意識的な変化」があったと述べています。里子の世話に関わることで、里親養育が若者たちに目的を与えて、「家族の中での居場所」を見つけることにつながるというポジティブな効果があった。

同様の知見は、Poland and Groze (1993)、Spears and Cross (2003)、Höjer and Nordenfors (2004, 2006) でも報告されており、回答者は「大家族の一員であることを楽しんでいる」、「里子と親しくしている」、「他の子どもを助けることができることを喜んでい」と述べている。Sutton and Stack's (2013) の研究に登場する子どもたちは、里親養育にはたいていの場合、有益な面があり、以前よりも外出や休暇が増えて生活が好転したと感じている。同様に、Thompson and McPherson (2011) のレビューでは、1つの研究を除いてすべての研究が、里親養育者の子どもが里子と一緒に暮らすことでポジティブな経験をしたと報告している。そのようなポジティブな経験とは、他の人を助けること、自信を持つこと、友達を持つことなどである。また、レビューした研究のうちの3つでは、里親養育を始めた後、家族がより親密になったと報告されている。

思いやりと共感力を高める

里親養育者によると、里親養育で子どもや若者の思いやりや共感のスキルが高まり、人間の生活についてかなりの知識を得ることができ (Fox, 2001; Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Part, 1993; Pugh, 1996; Swan, 2002; Watson and Jones, 2002; Younes and Harp, 2007)、他人の不幸についても学ぶことができた。里親養育者は、里親養育者になったことで子どもがより大きな共感力を身につけたと述べている (Höjer, 2001; Younes and Harp, 2007)。里親養育者からは、若者たちは「他人への気遣いが素晴らしく、年齢以上に複雑な感情の問題を認識している」と報告されている (Pugh, 1996, p.37)。同様に Swan (2002) は、彼らは責任感、思いやり、いたわりの気持ちを強く持っており、この感覚が自分のアイデンティティの一部であると述べている。Younes and Harp (2007, p.36) は、里親養育者は里親養育が子どもたちを「異なる人種や文化を学び、社会を意識し、子どもたちやあらゆる背景を持つ人々に対してオープンで、より良い人間にした」、「私たちが教えた以上に、子どもたちに人生について教えた」と信じていると報告しています。このような肯定的な態度は、里親養育者の間で、里親養育は子どもたちに「教育的効果」があり、共感と寛容の方法を教えてくれると考えられていることと一致している (Höjer, 2001,

2007; Younes and Harp, 2007)。

養育者の子どもの認識は、里親養育は子どもたちをよりオープンマインドにする効果があるというものであった (Pugh, 1996)。Höjer and Nordenfors (2004, 2006) の調査によると、養育者の子どもの 52% が、里親養育は良いことだと断言しており、なぜなら、里親養育によって、他人への思いやりや気遣いを学ぶことができるからである。研究の一般的なテーマは、里親養育によって、さまざまな種類の人生の状況や耐えている人たちの苦難を経験することである (Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Pugh, 1996; Sinclair, Gibbs and Wilson, 2004; Spears and Cross, 2003; Sutton and Stack, 2013)。彼らはこの知識を誇りに思っており、それによって自分は同世代の人たちや多くの大人たちよりも有能で情報に通じていると感じている。

以下のことをよく知ることができる。どのような人か、何を経験してきたのか。なぜ彼らはそのような行動をとるのか。友人と比べて、私は全く違う視点を持っている。

(Höjer and Nordenfors, 2006, p. 68)

持ち物、スペース、親との時間の共有

里親養育者の子どもは里親養育に肯定的であることが多いが、多くの研究では、持ち物を共有する必要性やパーソナルスペースの減少、親との時間へのアクセスの減少、葛藤、家の規則の厳格化など、子どもたちが感じている変化を認めている (Höjer, 2007; Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Part, 1993; Pugh, 1996; Spears and Cross 2003; Twigg, 1994, 1995)。寝室の共有はさらに議論を呼んだ (イギリスの一部のフォスターリング機関では許可されていない)。子どもや若者はさらに否定的で、寝室を共有することで自分や自分の持ち物のための個人的なスペースが減ることを、多くの人が本当に不快に感じていた (Part, 1993; Pugh, 1996)。

両親との時間を共有することは、両親が里親養育を始めたときに子どもの生活に最も具体的な影響を与えるものの一つであるが (Poland and Groze, 1993)、ある研究 (Denuwelaere and Bracke, 2007) では、養育者の子どもと里子は、両親・養育者から同じだけのサポートを受けていることを認識していると報告した。実際、今回の調査では、里子の自己価値は、養育者の子どもの自己価値よりも、親のサポートのレベルに影響される傾向が強かった。しかし、里親養育の措置を受ける子どもたちは、多くの場合、ネグレクトや虐待を経験しており、注意を払う必要性が高く、里親養育者は多くの時間を要する。里親養育者の子どもは、両親が里親養育者になると、親との時間や配慮を受けられなくなる可能性が高い (Höjer, 2007; Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Poland and Groze, 1993; Pugh, 1996; Spears and Cross, 2003; Twigg, 1994, 1995; Younes and Harp, 2007)。Poland and Groze (1993) は、親との時間を共有することが、里親養育者の子どもが里子を好きになるかどうか、里親養育者になったことで家族に生じた変化を受け入れるかどうか大きく影響することを明らかにした。

Twigg の研究 (1994, 1995) では、里親養育者の子どもは、里子に対する親の配慮の必要性を強く認識していたが、自分たちも親からの配慮を受ける権利があると感じていた。Höjer and Nordenfors (2004, 2006) は、里親養育者の子どもは、親が自分の話を聞いてくれる時間を待たなければならない、時にそれが無駄に終わる状況を説明していると指摘している。ある男の子 (16 歳) は、母親に自分のための時間を確保して欲しいときは、母親に予約をしなければならないと述べていた。回答者の 23% が、里親養育者としての活動が原因で、両親との時間が取れないと答えており、Thompson and McPherson (2011) のレビューでは、この点が大きな問題であると指摘されている。しかし、Sutton and Stack の研究 (2013 年) では、6 人の子どものうち 2 人だけが、親との時間を奪い合うことについて言及しており、1 人の女の子は、親からもっと注目されたいがために悪さをするようになったと述べている。2 人とも、親に相談して、悔しい思いをしたことを伝えて、この問題を解決した。

ママとパパに私たちの気持ちを伝えたと、ママとパパは私たちのことを愛している、里子と一緒に過ごしているからといって、愛していないわけではないと説明してくれました。そう言われただけで、効果があったのです。(Sutton and Stack, 2013, p. 7)

さらに、Sutton and Stack (2013) は、調査参加者に見られた里親養育に対する前向きな姿勢の理由の一つとして、問題について話し合うことが奨励されていたこと、また、親も子どもと一緒に過ごす時間を確保していたことを挙げている。

里子の行動上の困難の影響

ほぼすべての調査で、過去にネグレクトや虐待を受けた可能性のある子どもたちと一緒に暮らすことがいかに難しいかということが頻りに語られており、これまでの調査のレビューでも指摘されている。

(例: Twig and Swan, 2007) Sinclair, Wilson and Gibbs (2005) は、著しい行動上の困難は、里親養育者の子どもの里子に対する好感度に影響を与え、それが措置の中断レベルと関連していると結論づけている。里子と里親養育者の子どもの間に根強いトラブルがあると、措置が中断する原因の一つになりうる。しかし、Amorós らの研究 (2003) は、ほとんどの困難は適応の初期段階で発生し、時間とともに困難はなくなってくると示唆している。

Denuwelaere and Bracke (2007) は、里親養育者の子どもと比較して、里子の方が、攻撃的で挑戦的な行動が多いことを指摘している。Part (1993) の調査に参加した子どもや若者は、里親養育で一番嫌なことは、気難しくて迷惑な行動や盗み (24%) をすることだと答えている。また、Watson and Jones (2002) では、「盗み」や「物を壊されること」も里親養育で最も困難なこととされている。Martin (1993) は、自分の物が里子に壊されても、養育者の子どもは自分の気持ちを抑制することが期待されていることを明らかにした。Spears and Cross (2003) は、特に盗みは信頼を裏切る行為と感じられ、大きな反感を買っていると指摘している。彼らの調査では、参加した若者たちは、里子は

よく喧嘩をするし、嘘をついたり物を盗んだりするので、友人たちが里子を恐れて家に来たがらないこともあると述べている。彼らは不誠実であり、関心を買うために話を作る。(Höjer, 2007, p. 77)

Höjer and Nordenfors (2004, 2006) は、里子の行動上の困難の影響は、若い参加者に多く見られることを明らかにした。里子が嘘をつくこともあるし、やってもいないことで責任を取られることもあると話していた。子どもたちが難しい行動を理解し、対処することが本当に困難な時もあった。Twig (1995)、Fox (2001)、Swan (2002)、Höjer and Nordenfors (2004, 2006)、Höjer (2007) はいずれも、養育者の子どもが親とこの件について話すのは難しいかもしれないことを見いだしている。里子が嘘をついたり、作り話をしたりするなど、子どもが本当に問題だと感じている出来事は、大人には見過ごされ、自分の子どもがそのような行動をとった場合よりも重要度が低いとみなされていることが多い。同様に、Part (1993) と Spears and Cross (2003) は、里親養育者の子どもが、里子は簡単に「逃げて」しまい、自分が罰せられるようなことをしても罰せられないと考えていることを明らかにした。

私が彼らのようなことをしたら、一生外出禁止になってしまう..... 私はもっと厳格で、大人であることを求められています。(Spears and Cross, 2003, p. 42)

ある里親養育者の子どもは、まったく異なるタイプの問題行動について語っていた。

最悪なのは、子どもが問題を起こしているときではなく、子どもが何もしないときです。子どもが一日中座っていて、遊びもせず、話もしないとき.....。本当に最悪だと思う、癩に障るから。いたずらをして、それは悪いことではありません。それには対処できますから。(Martin, 1993, p. 19)

「外出するときは親に居場所を知らせる」、「食事の時間を守る」、「家族との付き合い方」など、基本的な家のルールを里子が全く知らないという回答もあった (Höjer, 2007)。また、同じ調査では、家族が集まって食事をしたときに劇的な変化があったと答えた人もいた。食事の時間になると、混乱が起こることがよく報告されていた。

彼女は食べることもできず..... 食事のたびに、思い切り叫んでいました。毎回の食事が... 事故のようでした。彼女にとってはとても辛いことでした。騒ぎ出したり、グラスをひっくり返したり..... 誰も注意できなかつたのは、彼女がこの状況に対応できなかつたからです。里子が来てからは、彼らが成長して大きくなっておいしい食事ができなくなってしまった。このような爆発は、あらゆる時期に発生しました。

(Höjer, 2007, p. 77)

子どもや若者もまた、里子が里親養育の措置を受ける前に問題のある経験をしていることを知っているため、それが原因でやってしまう行動を我慢してしまう。

叫ばれたり、叩かれたりすると悲しくなりますが、普段は何も言いません。彼らには彼らなりの問題があると思いますから。(Höjer, 2007, p. 78)

里親養育者の子どもは、寛容で理解しようと努めていますが、里子たちの難しい行動に対処するのは難しく、自分の否定的な感情に罪悪感を感じることもあった (Part, 1993; Pugh, 1996)。

罪悪感を感じます... 混乱しています... 普通のきょうだいのように接するべきなのか、それとも生綿で包んで別のものとして扱うべきなのか、わからなくなっています。(Pugh, 1996, p. 37)

無邪気さの喪失

里親養育はポジティブなイメージが強く、子どもたちは共感力や思いやりを学ぶことができるが、一方で、子どもたちの苦難や虐待、ネグレクトなどの情報に触れすぎてしまうというリスクもある。Pugh (1996) はこれを「無垢の喪失 (loss of innocence)」と呼んでいる。Höjer and Nordenfors (2006) の研究では、里親養育者の子どもの中には、里子にナイフで脅されたり、自殺を頻繁に予告されたりといった「恐ろしいこと」について研究者に語っている者もいた。

里親養育者の子どもの中には、性的虐待など「考えたくない問題にさらされた」という人もいた (Spears and Cross, 2003, p. 43)。これは、彼らがどう対処していいのかわからない情報だった。Younes and Harp (2007) の研究において、里親は彼らの子どもたちが、人生には悪いことが起こり得るという認識を持ち、この認識が子どもたちの信頼を低下させたと報告している。里親養育者の子どもへの影響は、里親養育者の懸念事項と考えられ、ある調査 (Poland and Groze, 1993) では、69%の里親が里親養育の子どもに与える影響を懸念していた。

責任と心配

Höjer and Nordenfors (2006) の調査によると、66%の子どもと若者が、里子に対して「非常に頻繁に」または「どちらかといえば頻繁に」責任を負っていると答えている。男女差があり、女性回答者は男性回答者よりも「責任感」が強い。どのような形で「責任」をとっているかを説明すると、「実のきょうだいと同じように責任をとる」、「ベビーシッター」、「教育」、「实际的な援助」、「精神的なサポート」などが多く挙げられた。また、34%の里親養育者の子どもが、里子のことを「とてもよく心配する」「どちらかというようによく心配する」と答えている。里子が自分の意思に反して実親のもとに戻らなければならない時、里子が実親を訪問したときに何が起こるか、里子自身の行動について、薬物やアルコールを乱用するよう

になるのではないか、「ふさわしくない」友人からひどい仕打ちを受けるのではないか、などを心配していた。女性回答者の心配は男性回答者の2倍である。今回の調査では、一般的に、里親養育者の子どもは里子たちがさまざまな種類のリスクにさらされる可能性があることを非常によく認識していることが示された。

何人かの里親養育者の子どもにとっては、自分が里子に対してどのように振る舞うべきかを見極めるのが難しかったようである。Pugh (1996) は、年長の子どもたち、特に女子が、里子との関係を仲間として見るのか、親として見るのか、戸惑いを感じていることを明らかにしており、同様の知見はThompson and McPherson (2011) のレビューでも認められる。Pugh は、「里親養育者の子どもは、成長が早まったり、発達のある部分が歪んだりするリスクがあるのではないか」という疑問を投げかけた。

親の期待

子どもたち自身の責任感に加えて、いくつかの研究では、子どもたちや若者たちは、自分たちが里子に対して善良であり、支援を惜しまないことを親から期待されていると感じていた。里親養育者の子どもは、幸運にも良い両親と良い家庭に恵まれたため、里子からの難しい行動にも耐えなければならないことが理解されていた。子どもや若者は、里子を自分や友達と一緒にいさせるように言われることが多いが、中にはそれが難しいと感じる者もいた (Fox, 2001; Höjer, 2007; Spears and Cross, 2003; Swan, 2002)。Höjer and Nordenfors (2004, 2006) は、子どもや若者の中には、親の期待する支援行動に応えられないと親が失望してしまい、それは本当に避けたいことだと言う者もいると指摘している。

里親養育者の子どもは、より理解を深めるよう求められ、自分のニーズよりも里子たちのニーズを優先するようであった。Swan (2002, p. 14) の研究では、「...自分の感情やニーズは二の次で、家族の中で疎外感を持つこともあった」と感じている参加者もいた。またSwanは、里親養育者の子どもや若者は、失敗したり、自分自身の問題を抱えたりする可能性のない、完璧な存在である必要性を感じていたことを見いだした。里子が里親養育者の子どもを迷わせているという証拠もある (Sinclair, Wilson and Gibbs, 2005)。里親養育者の子どもたちに期待されるのは、良いロールモデルとなること、良い手本となること、「完璧」であること、理解と忍耐を持つこと、などがレビューした研究で広く報告されている。

保護者の負担軽減

いくつかの研究では、子どもや若者が、他の子どもたちを助けようとする親の姿勢を誇りに思っていることが報告されている (Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Younes and Harp, 2007)。里親養育者の子どもは、以前のレビュー (Twig and Swan, 2007 など) でも指摘されているように、親が里親養育を成功させることがいかに重要であるかを認識していることが多い。そのため、彼らは両親の里親養育を円滑に進め、彼らが里親養育者としてうまくやっけていけるように努めていた。この円滑化は様々な形で表現される。子どもや若者は、里子にできるだけ親切にしようしたり、両親を助けるために年下の里子の世話をしたりすることがある。Höjer and Nordenfors (2004, 2006) の研究では、60%近くの若者が、「里子が原因で母・父が困っているときには、私は母・父に良くしてあげよう、支えてあげようと思っています。」という言葉に同意している。Swan (2002) は、里親養育者の子どもは、親に問題を起こさないように、できるだけ「良い子」でいたいと思っていると報告している。

もし私が壁にぶつかったり、問題を抱えていたりしたら、両親にさらなるストレスを与えてしまうことになるので、私は確かに良い子にならなければならないと感じていました....。子どもの世話をするという意味で両親の生活にこれ以上ストレスを与えてしまったら、もしかしら彼らにとって負担になるかもしれないと思いました...。そうしたら彼らは里親養育を諦めてしまうかもしれませんが、私はそうなってほしくないと思いました....。そして、その責任を負いたくなかったのです。(Swan, 2002, p. 15)

同様に、Sutton and Stack (2013) は、子どもと若者が自分たちのケアの役割を両親にまで拡大していることを発見した。彼らの研究に参加した人たちは、里子が困難な状況にあたり、攻撃的な行動を示したりすると、親（母親）を守らなければならないと感じていた。研究者が若い参加者に、里子の問題行動が家族にどのような影響を与えたかを尋ねたところ、全員が自分自身ではなく、母親に与えた影響を挙げた。しかし、Younes and Harp (2007) の研究では、里親養育者は、自身の子どもが怒りっぽくなり、ストレスを感じるようになり、ある子どもは髪の毛を引き抜くようになり、別の子どもは憤慨して反抗的になったと報告している。Sinclair, Gibbs and Wilson (2004) は、里親養育者が子どもへの影響を考慮して里親養育者をやめる決断をしたと報告しているケースがあることを指摘している。

調査から得られた一般的なテーマは、子どもや若者が、自分自身の問題やニーズは、里子の問題ほど重要ではないと認識していることであった。里親養育者の子どもは、自分のニーズよりも里子のニーズを優先しなければならず、それがストレスになっていると感じることが多い (Höjer, 2007; Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Martin, 1993)。親を助けようとするもう一つの方法は、自分の問題を親に話さないという選択であった (Fox, 2001; Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Swan, 2002; Younes and Harp, 2002)。その結果、里親養育者は、自身の子どもたちが見られずに寂しい思いをして生活していることを知らずにいることがある。

母を疲れさせたくないで、自分の悩みを相談したくありません。 あえて「一緒に買い物に行こう」とは言わないのは、もしもそれができないと、母に「自分が時間を割いてあげられないから」と思わせることになり、良心の呵責に耐えられないからだと思います。私は母の邪魔をしないようにしなければならないと思っています。なぜなら、母は今でも十分に大変なのですから。自分が母の重荷になっているような気がします。(Höjer and Nordenfors, 2006, p. 202)

Twigg (1994) の研究では、ある参加者は、里親養育が難しいと思っていることを両親に伝えられないことで特に傷ついたと感じていた。

もし親が子どもとの健全な関係を望むならば、子どもに何が起こっているのかを知り、それに対して何かしようとするでしょう。(Twigg, 1994, p. 307)

守秘義務

里親養育者の子どもに関する調査では、守秘義務の問題も影響の一つとして挙げられている。子どもや若者は、里子の詳細を明かしてはいけないことを認識しており、里子の弱さを慮っていた (Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Martin, 1993)。Spears and Cross (2003) は、里親養育者の子どもが、里子たちに質問をしすぎることに気をつけていることを明らかにした。

彼らを動揺させるかもしれないので、彼らの背景については聞かないように言われている。(Spears and Cross, 2003, p. 41)

子どもたちの中には、秘密を守ることが難しいと感じている者もいた。その理由の一つは、里子の難しい行動を仲間に説明すると、機密情報が漏れてしまうため、説明できないというものであった。Höjer and Nordenfors (2004, 2006) の調査によると、子どもや若者は、里子に関する機密情報を権限のない人に漏らさない責任があると考えている。これが問題になったこともあった。

起こったことを誰にも話してはいけないというのは、とても辛いことです。誰かに聞かれても、何も言えない…。(Höjer and Nordenfors, 2006, p. 87)

Spears and Cross (2003) は、彼らの調査では、里子に頼まれて秘密を守った若者もいたが、ほとんどの若者は秘密を守らないと答えたと述べている。Höjer and Nordenfors (2004, 2006) は「秘密」を3つのカテゴリーに分けた。

- 里子が子どもに秘密を話し、子どもはそれを誰にも話さないと約束しなければならなかった。回答者の43%が、里子から秘密を聞かされた経験があると答え、20%がそのことを悩みの種にしていた。
- 里親養育者やソーシャルワーカーから、里子に関する機密情報を知らされ、それを里子に漏らしてはいけないと言われる。61%にそのような経験があり、15%が問題であると考えていた。
- 里子のことを友人に話すことはできない。70%が、友達には言えないような里子の事情を知った経験があると答え、15%がそれが心配だったと答えた。

Martin (1993) は、大人への信頼を失っている可能性のある里子が、里親養育者の子どもにトラウマ的な経験を開示することは容易に起こりうることを主張している。そのため、里親養育者の子どもにとっては、親に言うべきかどうかという葛藤が生じることがある。Martin の調査に参加した若者は全員、大人から聞く前に里子から情報を開示された経験があり、Martin は、里親との明確でオープンな話し合いの必要性と、里親養育者の子どもへの情報提供の必要性を強調して結論づけている。

措置終了への対応

いくつかの研究では、子どもや若者が、里親養育で最も困難な経験の一つは、里子が家族から離れなければならないときだと述べている (Sutton and Stack, 2013; Walsh and Campbell, 2010; Watson and Jones, 2002; Younes and Harp, 2007)。Fox (2001) の研究では、若者は里子が出て行かなければならないときに、相談や情報提供を受けられないのは特に辛いことだと考えていた。Walsh and Campbell (2010) は、里親養育者の子どもが措置終了にどのように対処するかを具体的に調べ、子どもの意見が措置の移動のプロセスに含まれることはほとんどなく、あったとしてもその意見は両親を通して伝えられる傾向にあることを指摘している。1つの措置が終了した時点での未解決の感情が、次の措置における里親養育者の子どもの関与に影響を与えることがあった。

Sutton and Stack (2013) の研究では、ほとんどの参加者が、里子が家族を離れたときの喪失感や悲しみに対処する方法を見つけていた。しかし、一人の女の子は、措置が終わったことについて、「自分のせいだ」と動揺していた。彼女は、その子を好きではなかったこともあり、罪悪感を感じていた。この子も、里子に「近づきすぎない」という戦略で、彼らが去るときに傷つかないようにしていた。

里子が残るか去るかかわからないので、あまり近づかないようにしないと、彼らが去るときに余計に辛くなりますからね。そう、彼らとは友達になってはいけないのです。(Spears and Cross, 2003, p. 41)

また、措置と次の措置の間、すなわち里親となる家族が次の里子を迎えるまでの間、休息が必要とされているようであるが (Sutton and Stack 2013; Swan, 2002; Twigg, 1995; Watson and Jones, 2002; Younes and Harp, 2007)、実際には、これはフォスターリング機関側にとっては非現実的な期待かもしれない。

里親養育者の子どもと里子の関係に年齢が与える影響

レビューした研究では、里親養育者の子どもと里子の年齢差が、しばしば彼らの関係に影響を与えていることが明らかになった。しかし、経験の個人差があるため、里親養育者を承認する際に年齢の境界線を厳格に適用することは役に立たないかもしれない。里子が里親養育者の子どもよりも若い場合、年齢に近い

場合よりも良好な関係が報告されている (Höjer and Nordenfors, 2004, 2006)。里子との衝突も年齢と関係していた。里子との衝突は、年下の子どもの方が年上の子どもよりも多く関わっていた。しかし、自分と同じ年齢の里子がいる場合は、さまざまなレベルの競争やライバル関係を経験していることが多く報告されている (Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Sinclair, Wilson and Gibbs, 2005; Twigg, 1994)。Sinclair, Wilson and Gibbs (2005) は、子どもたちの相対的な年齢差が重要であるかもしれないと指摘している。里親養育者が、子どもが里子を嫌っていると答える割合が、両者の年齢が近いほど高くなっていた。年齢が近いこと自体は不調と関連しなかったが、里親養育者の子どもに嫌われている里子は、委託不調をする可能性が高くなった。また、Höjer and Nordenfors (2006) は、里親養育者の子どもと里子の間に年齢差がある方が関係が良好であるとしている。14~17 歳の子どもたちは、年齢の近い里子が自分たちと同じようになりたがっていると話していた。ある女の子は、里子が自分とまったく同じ色に髪を染めていることや、友達とおしゃべりしているときにその子が自分の発言をそのまま繰り返していることを紹介した。

彼女が私のようになりたいと思っていることは「ママ」「パパ」と呼ぶときよりもひどく、最悪でした。(Höjer and Nordenfors, 2006, p. 96)

Pugh (1996) は、年上の里親養育者の子どもは、一般的に里子に脅かされることが少なく、自分が里親養育プロセスに貢献していると考える傾向が強いという印象を持っている。同様に、Sutton and Stack (2013) の研究では、子どもたちは里子に同年代かそれ以下の年齢を望んでいることがわかった。彼らは、年上の里子は、里親養育チームの中での自分の「助け合いの役割」を脅かす存在であると考え、自分が積極的に「助け合い」をし、チームの一員であることを望んでいた。

自分よりもずっと年上の里子だと、自分が世話をしているような気がなくなってしまふからです。そうなると、何かを手伝ってもらふことになるかもしれないし、それは嫌だと思いました。(Sutton and Stack, 2013, p. 8)

Younes and Harp (2007) の調査では、家族の中で子どもたちの立場が変わったと報告している。例えば、自分が家族の中で最年少でなくなったり、最年長でなくなったりするが、その事実は問題であることに気づいた。なぜならば、元の生まれた順序を気に入っていたからである。Thompson and McPherson のレビューでは、同様に、里親養育者の子どもが家族の中での自分の居場所を失ってしまうことがあり、それが彼らのアイデンティティに悪影響を及ぼす可能性があることが指摘されていた。

里親養育に対する認識

要約すると、レビューした研究の大部分の子どもと若者は、里親養育に対して肯定的な態度をとっていた (Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Part, 1993; Pugh, 1996; Spears and Cross, 2003; Sutton and Stack, 2013; Younes and Harp, 2007)。Höjer and Nordenfors (2004, 2006) は、里親養育者の子どもの 75% が、里子たちと「とても良い」または「どちらかというが良い」関係を築いていると報告している。しかし、良好な関係を築いていることは、里子へのコミットメントが高いことを意味し、その結果、里子が困難に直面したときに里親養育者の子どもが心配したり、里子が家族のもとを去ったときに悲しみを感じたりすることが、知見に反映されている (Fox, 2001; Höjer and Nordenfors, 2004, 2006; Sutton and Stack 2013; Watson and Jones, 2002; Younes and Harp, 2007)。Younes and Harp (2007) は、里親養育者と子どもの両方が、最初は気分が高揚していたが、嫉妬、競争、恐怖、不安などの問題も、里親養育者になることによる変化の一部であると述べている。これは、レビューしたほとんどすべての研究で確認されている。Twigg (1995) は、里親養育者の子どもが里親養育に対処するために 3 つの異なる戦略を用いていることを明らかにした。

- 里子を、愛情を必要とする課題を持った子どもとみなす。若者たちは、里子の良いところを見つけようとし、自分の家族が子どもを助けていることを強調した。
- 里親養育の経験から自分を隔離する。一部の若者、特に男性参加者は、里子や里親養育の経験全体から距離を置こうとしていた。そのための一つの方法は、家に近づかない、あるいは自分の部屋にこもるということだった。
- 里子を客観視する。これは、出入りの激しい里子を大量に受け入れた家庭に多く見られた。Twigg(1995)も、家族の境界線を維持するための手段であったと示唆している。

子どもや若者からのアドバイス

レビューした研究では、里親養育の経験に関する子どもたちの発言が数多く見られる。中には、里親養育者の子どもが、他の子どもたちや里親養育者、ソーシャルワーカーに直接アドバイスをしているものもある。例えば、Spears and Cross (2003) の研究に参加した子どもや若者は、これから里親養育を始めようとしている仲間に、次のようなアドバイスをしている。

里親養育者の子どもへのアドバイス

- 嫉妬するくらいなら、世話をしないでいいですよ！
- 自分のことは自分で気をつける。慎重になりましょう。
- 大切な持ち物は大事に保管してください。
- 気に入らなければ、はっきりと言うべきです。
- 親を助け、その子を助け、その問題を解決しましょう。
- 彼らと友達になってください。
- いずれ家から去って行くので、あまり親密にならないように。
- 里子のことを友達に噂してはいけません。
- 里親養育されるようになる前の子どもたちがどのような状況に置かれていたのか、他の人たちに理解してもらいましょう。
- 彼らと良い関係を築いてください。
- 自分だけの隠れ家的な空間を持つこと。
- 隠し事はしないでください。
- 時には無視したり、放っておかなければなりません。議論や喧嘩をしてはいけません。
- 困ったことがあれば、ため込まずに、誰かに話してみてください。
- 必要であれば助けを求めてください。
- 自分はあらゆる面で養育すると、子どもたちに言わないようにしましょう。

(Spears and Cross, 2003, p. 44)

Höjer and Nordenfors (2006) では、ディスカッショングループに参加した子どもや若者に、家族が里親養育を始めようとしている子ども、里子、里親養育者、ソーシャルワーカーにアドバイスを求めるよう求めた。子どもたちは、研究者がいないところでグループワークを行い、自分の提案を書き留めていった。彼らの仲間へのアドバイスは、上記の Spears and Cross (2003) のアドバイスと非常によく似ている。以下は里親養育者の子どもの2つのグループ(11~14歳と15~17歳)からの里親養育者へのアドバイスである。

里親養育者の子ども（11～14歳）から里親養育者へのアドバイス

- 自分の子どもを忘れないでください。
- 子どもにやるべきことは、里子抜きでやってください。
- 公平であること！
- 「昔の家族」を忘れないでください。
- 自分の子どもと里子を友人にしてはいけません。
- 自分で問題に対処させてください。
- 里子にはもっと厳しく。
- 里子が悪いことをしたら罰してください。
- 里子が嘘をついていることに気付き、自分の子どもを非難しないでください。

(Höjer and Nordenfors, 2006, p. 277)

里親養育者の子ども（15～17歳）から里親養育者へのアドバイス

- 自分に優しくしてあげてください。あなたにはその価値があります。
- もっと厳しくしてください。
- ストレスを溜め込まないようにしてください。
- 私たちを一人でいさせてください。
- 自分の子どもと里子を同じように扱ってください。
- もっと我慢してください。
- 自分の子どもとの時間を大切にしてください。

(Höjer and Nordenfors, 2006, p. 277)

研究のギャップ

里親養育者の子どもの経験の重要な側面に関する研究基盤には、いくつかのギャップがあることがわかった。

きょうだいとの関係

里親養育者の子どもとそのきょうだいとの関係に里親養育が与える影響について言及した研究は 2 件のみであった。Younes and Harp (2007) は、里親養育が養育者の子どもとそのきょうだいとの関係に与える影響について、子どもたちにさまざまな意見があることを指摘している。変化なしとする報告がいくつかある一方で、親密度が増した報告が 1 件、回答者の子どもよりもきょうだいの方が里子と仲良くしている場合には、親密度が低下して喧嘩や競争が起こるなどのネガティブな変化の報告が 4 件あった。同様に、Höjer and Nordenfors (2006) も様々な経験を報告している。里親になったことできょうだいとの距離が縮まったという若者もいれば、里親になったことできょうだいの距離が広がり、喧嘩や衝突が増えたという若者もいる。50%以上が影響はないと回答し、24%が全体的にポジティブな影響があったと感じていた。

里子の実親との接触

里子の実親との接触が里親養育者の子どもに与える影響についての情報は乏しい。Martin (1993) は、若者たちは、里子を理解するだけでなく、訪問時の里子の親の行動を理解しなければならないというさらなるプレッシャーがあることに気づいたと述べている。里親養育者の子どもは、「... 自発的な反応を隠し、機転を利かせて理解する必要性に敏感になっていた」(Martin, 1993, p. 20)。

Höjer and Nordenfors (2006) と Höjer (2007) では、回答者の約半数が、里子の実親との面会は彼らの生活にほとんど影響を与えないと答えているが、特に里子が実親からの虐待にさらされていた場合には、そのような面会を困難なものと感じる回答者もいた。参加した女子の中には、両親から深刻な性的虐待を受けた里子がいた。

彼らがしてきたことを知っていて、それでもそこに座って親切にしなければならないというのは、本当に辛いことです。私はいつもそれが難しいと感じています。問題を起こすのは、子どもではなく、その親です。会うたびに、会った後に... 子どもたちが見せる不安..。(Höjer and Nordenfors, 2006, p. 177)

ソーシャルワーカーとの接触

里親養育者の子どもがソーシャルワーカーに認識され、連絡を受ける度合いは様々であり、この問題はほとんどの研究で取り上げられていない。Poland and Groze (1993) によると、里親養育者の子どもの 39% が、ソーシャルワーカーが里親養育について話すために家族と会っていた（しかし、彼らとは特に話をしていない）と言及している。いくつかの研究では、里親養育のケースワーカーが家庭訪問の際に里親養育者の子どもと接する時間を増やすべきことに、子どもと里親養育者の双方が同意している (Höjer and Nordenfors, 2006; Poland and Groze, 1993; Swan, 2002; Watson and Jones, 2002)。このレポートの草稿にコメントを寄せてくれた里親養育者の一人は、ソーシャルワーカーが里親養育者の子どもを残して、里子を「おやつを食べに」連れ出すことがあると指摘した。自分のことを聞いてくれていると感じる子どももいたが、Watson and Jones (2002) の研究では、ソーシャルワーカーが自分の意見を考慮してくれたと答えたのは 5 分の 1 強で、50%以上がソーシャルワーカーにもっと関与させる方法について直接アドバイスをしていた。

一方、Swan の研究（2002 年）では、すべての里親養育者の子どもがこの問題について怒りを表明し、ソーシャルワーカーが自分たちを疎外し、自分たちの努力をまったく認めていないかのように感じていた。ソーシャルワーカーが訪ねてきても、会議や会話に参加することはできなかった。子どもや若者は、里親養育者や他の大人とは別の方法で里子と接しているため、里子について具体的で、ユニークな知識を持っている可能性があるとは指摘した。そのため、ソーシャルワーカーは彼らの専門性を認め、里親養育プロセスに貢献させるべきだと考えていた（Swan, 2002; Höjer and Nordenfors, 2004, 2006）。

現在のエビデンス基盤の限界

ほとんどの研究は定性的なもので、里親養育者の子どもの里親養育体験についての視点は興味深いものであったが、実際に何が起きているのかについてのしっかりとした評価はなかった。4つの研究を除いて、サンプル数が少なく（参加者が20人以下）、一般化の可能性は限られていた。ほとんどの研究では、過去に経験した里親養育の影響について、里親養育者やその子どもの視点を求めるレトロスペクティブ（後ろ向き）な手法を採用している。さらに、レビューでは、里親養育者の子どもの準備や支援を向上させることを目的とした介入で、比較群や対照群による評価が可能なものはなかった。

結論

里子と里親養育者の子どもはそれぞれ個人であり、その個性は里親養育の経験の仕方や両者の関係に影響を与える。しかし、里親養育者の子どもへの影響に関する国際的な研究のレビューから、いくつかの明確なメッセージが浮かび上がってきた。

里親養育の決定に関わったことで、その後の適応力が高まる

里親になるかどうかの決定に参加することの重要性は、多くの研究での主要な知見である。里親養育者の家族の子どもや若者は、里親になる決定に関する家族の話し合いに参加する必要がある、家族の中で重要性の低い、受動的なメンバーと見なされてはならない。このレビューのエビデンスは、里親養育が彼らの生活に影響を与えることを示唆しており、彼らはどのように、どのような形で影響を受けるかを理解する必要がある。

里親養育について、またそれぞれの子どもについての情報を得ることで、衝突を減らすことができる

家族が里親になることを決断したとき、子どもや若者も同様に、里親養育の性質（良い面と悪い面の両方）について説明を受ける必要がある。いくつかの研究では、里親養育者の子どもが、ピアサポートグループは情報を提供する良い方法であると示唆しており、いくつかのフォスターリング機関がこのようなグループを運営しているが、しっかりとした評価は行われていない。例えば、英国の The Fostering Network は、このグループに特化した雑誌（「Thrive」）などを作成したり、彼らの貢献を称えるキャンペーン活動を行っている。他の国でも同じような制度があるかもしれない。しかし、このような活動が評価されなければ、子どもたちの成果にどのような影響を与えているかは不明である。

情報は、里親養育の初期段階だけでなく、里親養育の全過程において重要である。里親養育者と同様に子どもや若者も特定の里子が家族に加わる前にその情報を知る必要がある。そのような情報は、彼らの理解や困難な行動への対処を容易にし、子どもらは自分らが関与しており、遂行能力があり、そのプロセスの一部であると感じられるようにする。これは、ソーシャルワーカーや里親養育候補者への重要なメッセージである。里親養育者の子どもがその果たす役割を認識し、彼らへ適切な情報を提供することが必要である。関連情報を受け取った子どもや若者は、里子との関係が格段に改善されたことが明らかになった。

里親養育者は自身の子どものために「守られた」時間を見つける必要がある

多くの研究では、子どもや若者は、両親が里親養育の仕事に広く関わっていることを示唆していた。彼らは、両親が自分たちと一緒に過ごす時間が十分ではなく、里親養育が原因で十分な話を聞くことができなかったと述べている。時には、家族の中で排除されているような気がする、親から忘れられているような気がする、と子どもや若者が言うこともあった。彼らは、里親養育という仕事の重要性を認識し、両親が里子に十分な配慮をしなければならないことを認めていたが、それでも自分たちは取り残されていると感じることがある。

情報の制限およびセンシティブな情報

調査対象者の中には、「あまり多くの情報は欲しくない」という意見もあったが、これは特に若い子どもたちに多く見られた。参加者の中には、あまり関わりたくないという人もいたが、それは関わるということは責任を負うことでもあるからである。里親養育者の子どもたちと里親養育者自身が、子どもたちが虐待やネグレクト、暴力に関する情報を処理しなければならないことがあり、それは非常に困難なことだと示された研究例があった。

問題について話し合うことが許されること

里親養育者の子どもに関する調査から得られたその他の重要なメッセージは、里親養育が家族にもたらす日常生活の大きな変化を反映している。これらの変化には、ポジティブな面とネガティブな面がある。ネガティブな面の例としては、親との時間を共有するために親の注意を引くことができない、持ち物を共有したり、個人のスペースが狭くなったり、里子の難しい行動に対処したりしなければならぬなどの可能性がある。中には里親になることのネガティブな面を恨んでいるという子どもや若者もいたが、多くの子どもや若者はうまく対処しているようであった。

対処能力を向上させる要因の一つは、主に両親やソーシャルワーカーとの間で、認識している困難についてオープンに話し合う機会があったことである。子どもや若者が里親養育の問題点を訴えることが許され、ネガティブな感情を表に出すことができるようになれば、問題に対処する能力が高まる。調査に参加した子どもや若者の中には、「自分は困っているが親に迷惑をかけたくない」という声や、「自分には苦情を言う資格がない」という考えを持っている者もいた。

措置を終了する際の里親養育者の子どもの準備

措置が終了する際にも、情報提供や家族全員での話し合いが重要になる。子どもや若者の中には、措置が終了することが里親養育の最も困難な側面であると述べている者もいた。里親養育者の子どもが、里子が家族のもとを離れたときに何も知らされず、悲しみや喪失感を認識してもらえなかったと感じている例がいくつかあった。

1 WWW.FOSTERING.NET/ALL-ABOUT-FOSTERING/SONS-DAUGHTERS

政策と実践のための提言

里親養育者の子どもを養育プロセスに参加させる

里親養育者は、里親養育を始めることについての話し合いや決定に、彼らの子どもがどのように関わることができるかを検討する必要がある。里親養育サービスは、彼らの声に耳を傾け、特に彼らが積極的な養育者として認識されるようにすることで、これを促進するべきである。

里親養育者の子どもに十分な情報を提供すること

里親養育サービスは、里親養育者の子どもへの情報提供とサポートを改善するために、現在の慣行を見直すべきである。里親養育提供者の中には、里親養育を始める家庭の子どもたちに一連の情報を提供したり、説明会を開いたりするところもあるが、これは一貫して行われておらず、評価もほとんどされていない。しかしながら、ソーシャルワーカーや里親養育者は、子どもや若者の話に耳を傾け、彼らがどのような情報を必要としているかを敏感に察知する必要がある。

里親養育者の子どもには継続的なサポートが必要

里親養育者の子どものためのサポートグループは、継続的な課題に対処できるようにするための重要な手段であり、これらのグループの利点は評価されるべきである。里親養育経験のある里親養育者の子どもたちは、これらのグループに重要な貢献をすることができる。

里親養育者とソーシャルワーカーは、里親養育者の子どもに困難について話し合う機会を与える必要がある

里親養育者の子どもは、(ソーシャルワーカーが進行役を務める必要があるかもしれないが)主に両親との間で、そしてソーシャルワーカーやサポートワーカーと、認識している困難についてオープンに話し合う必要がある。このような機会は、子どもや若者が里親養育についての自分の気持ちを明らかにし、里子や里親養育に否定的な場合には受け入れてもらえるようにする必要がある。このようにオープンに話し合うことで、子どもや若者が自分の気持ちを理解し、対処しやすくなる。

里親養育者の子どものためのペアレンティングに費やす時間の確保

ソーシャルワーカーやサポートワーカーは、里親養育者が自分の子どもとだけ過ごす時間を確保できるようにサポートする必要があり、場合によっては里子のレスパイトを手配することもある。里親養育者に対する矛盾した要望は、この時間を確立しようとする過程で認識されなければならない。この時間がないと、里親養育者の子どもが孤立し、取り残されたように感じるという強いエビデンスがある。しかし、里子は里親養育者の子どもとは違う扱いを受けていると感ずることがあるので、子育ての時間のバランスをとることは、慎重に行わなければならない。

トレーニングと専門的能力の開発

これらの意味合いとして、特に里親養育者や子どもの心配事に耳を傾けることの重要性は、ソーシャルワーカーや学校スタッフのトレーニングや専門的能力の開発に含まれる必要がある。

研究のための提言

このレビューで取り上げた研究は、一般的に定性的で小規模なものであり、養育者とその子どもの回顧的な認識に依存していた。そのため、今後の研究では、

- 里親養育者の子どもにとっての里親養育のメリットとリスクを明らかにしようとする、里親養育者の子どもの視点に関する大規模な研究を行うべきである。この研究は、いわばここでレビューした先行研究を基に、養育された子どもや里親養育家族の特徴や考え方（例えば、性別、障害、民族性、家族構成、ペアレンティングスタイルなど）を、里親養育者の定着、措置の安定性、里親養育者と子どもの教育的成果などの具体的な成果に結びつけるものである。
- 里親養育者の子どもにとっての養育のメリットを増やし、デメリットを減らすための介入の評価。例えば、一連の情報、サポートグループ、キャンペーンの提供、ソーシャルワーカーやサポートワーカーが里親養育プロセスにおけるこれらの子どもの役割を認識するために採用する特定の戦略などに関してである。
- 里親養育者の子どもが、自分の家族が里親養育することになる子どもや若者の準備段階で果たす役割や、里子や他の家族の養育者の子どもを手助けする役割を果たす可能性があることを対象とした介入に対する評価。
- 里親養育者の子どもを対象としたプロスペクティブ（前向き）な縦断的研究で、両親が里親養育について最初に話し合った時から、その後、家庭に迎えられた里子の経験までを追跡したもの。補完的な研究として、里親養育した家族の成人を対象として、より社会的でレジリエンスのある市民になっているかどうか、社会的養育や教育関係の仕事に就く割合が高いかどうか、自分自身が里親養育者になる割合はどうかなど、長期的な効果への反映について検討することもできるであろう。

リースセンター（Rees Centre）は、堅牢で有用かつ適時の調査を提供することに尽力している。本レビューの知見について幅広い利害関係者と相談し、これらの提言をどのように進めていくかを検討していく予定である。皆様のご意見をお待ちしております。

Ingrid Höjer（コンサルタント）

Judy Sebba（ディレクター）

Nikki Luke（リサーチ・オフィサー）

リース里親養育および教育研究センター

REES.CENTRE@EDUCATION.OX.AC.UK

参考文献

- Amorós, P., Palacios, J., Fuentes, N., León, E. and Mesas, A., 2003. *Familias Canguro: una experiencia de protección a la infancia*. Barcelona: Colección d' Estudios Sociales, Fundació La Caixa.
Available at:
http://obrasocial.lacaixa.es/deployedfiles/obrasocial/Estaticos/pdf/Estudios_sociales/vol13_es.pdf [Accessed 16 October 2013].
- Berridge, D. and Cleaver, H., 1987. *Foster home breakdown*. Oxford: Basil Blackwell.
- Brannen, J., Heptinstall, E. and Bhopal, K., 2000. *Connecting children*. London: RoutledgeFalmer.
- Cautley, P.W., 1980. *New foster parents: the first experience*. New York: Human Services Press.
- Denuwelaere, M. and Bracke, P., 2007. Support and conflict in the foster family and children's well-being: a comparison between foster and birth children. *Family Relations*, 56(1), pp.67-79.
- Farmer, E., Moyers, S. and Lipscombe, J., 2004. *Fostering adolescents*. London: Jessica Kingsley Publications.
- Fox, W., 2001. *The significance of natural children in foster families*. Norwich: Social Monographs, School of Social Work and Psychosocial Studies, UEA.
- Höjer, I., 2001. *Fosterfamiljens inre liv*. Dissertation. Göteborg: Department of Social Work, Göteborg University.
- Höjer, I., 2007. Sons and daughters of foster carers and the impact of fostering on their everyday life. *Child and Family Social work*, 12(1), pp.73-83.
- Höjer, I. and Nordenfors, M., 2004. Living with foster siblings - what impact has fostering on the biological children of foster carers? In: Eriksson, H. G. and Tjelflaat, T. (eds.) *Residential care, horizons for the new century*. Aldershot: Ashgate. pp.99-118.
- Höjer, I. and Nordenfors, M., 2006. *Att leva med fostersyskon (Living with foster siblings)*. Institutionen för socialt arbete, Göteborgs universitet .
- James, A. and Prout, A., 1997. *Constructing and reconstructing childhood: contemporary issues in the sociological study of childhood*. London: Falmer Press
- Kalland, M. and Sinkkonen, J., 2001. Finnish children in foster care: evaluating the breakdown of long-term placements. *Child Welfare: Journal of Policy, Practice, and Program*, 80(5), pp.513-527.
- Martin, G., 1993. Foster care: the protection and training of carers' children. *Child Abuse Review*, 2(1), pp.15-22.
- Part, D., 1993. Fostering as seen by the carer's children. *Adoption and Fostering*, 17(1), pp.26-31.
- Poland, D. and Groze, V., 1993. Effects of foster care placement on biological children in the home. *Child and Adolescent Social Work Journal*, 10(2), pp.153-164.
- Pugh, G., 1996. Seen but not heard? Addressing the needs of children who foster. *Adoption and Fostering*. 20(1), pp.35-41.
- Quinton, D., Rushton, A., Dance, C. and Mayes, D., 1998. *Joining New Families*. Chichester: Wiley.
- Sebba, J., 2012. *Why do people become foster carers?* Oxford: Rees Centre.
- Sinclair, I., Gibbs, I. and Wilson, K., 2004. *Foster carers: why they stay and why they leave*. London: Jessica Kingsley Publications.
- Sinclair, I., Wilson, K. and Gibbs, I., 2005. *Foster placements: why they succeed and why they fail*. London: Jessica Kingsley Publications.
- Spears, W. and Cross, M., 2003. How do 'children who foster' perceive fostering? *Adoption and Fostering*, 27(4), pp.38-45.
- Swan, T.A., 2002. The experiences of foster caregivers' children, *Canada's Children*, 9(1), pp.13-17.

- Sutton, L. and Stack, N., 2013. Hearing quiet voices: biological children's experiences of fostering. *British Journal of Social Work*, 43(3), pp. 596-612.
- Thompson, H. and McPherson, S., 2011. The experience of living with a foster sibling, as described by the birth children of foster carers: a thematic analysis of the literature. *Adoption and Fostering*, 35(2), pp. 49-60.
- Triseliotis, J., Moira, B. and Hill, M., 2000. *Delivering foster care*. London: British Agencies for Adoption & Fostering (BAAF).
- Twigg, R., 1994. The unknown soldiers of foster care: foster care as loss for the foster parent's own children. *Smith College Studies in Social Work*, 64(3), pp. 297-312.
- Twigg, R., 1995. Coping with loss: how foster parents' children cope with foster care. *Community Alternatives*, 7(1), pp. 1-12.
- Twigg, R. and Swan, T., 2007. What research tells us about the experience of foster carers' children. *Adoption and Fostering*, 31(4), pp. 49-61.
- Walsh, J. and Campbell, H., 2010. *To what extent does current policy and practice pay adequate attention to the needs of the sons and daughters of foster carers, particularly in the context of planned or unplanned placement endings?* London: The Fostering Network/ CWDC.
- Watson, A. and Jones, D., 2002. The impact of fostering on foster carers' own children. *Adoption and Fostering*, 26(1), pp. 49-55.
- Younes, M. and Harp, M., 2007. Addressing the impact of foster care on biological children and their families. *Child Welfare*, 86(4), pp. 21-24.

付録

表 1: レビューに含まれる研究の詳細

参考文献	国	参加者数	方法論
Amorós, Palacios, Fuentes, León and Mesas, 2003	スペイン	89 世帯の里親養育家庭	アンケート インタビュー
Denuwelaere and Bracke, 2007	ベルギー	100 家族から 384 名 里親養育者の子ども、里親養育者、里親養育者のパートナー	アンケート 自尊心尺度 自己効力感テスト/自己報告書 子どもの行動チェックリスト
Fox, 2001	イギリス	里親養育者の子ども 8 名	インタビュー
Höjer and Nordenfors, 2004, 2006 Höjer, 2007	スウェーデン	684 件のアンケート 17 のフォーカスグループ 16 のディスカッショングループ 8 のインデプスインタビュー 里親養育者の子ども	アンケート、フォーカスグループ、ディスカッショングループ インタビュー
Martin, 1993	イギリス	里親養育者の子ども 7 名 1 つのフォーカスグループ	縦断的 - 1 年半にわたり定期的に会った
Part, 1993	イギリス	里親養育者の子ども 75 名	アンケート
Poland and Groze, 1993	アメリカ	里親養育者の子ども 51 名 里親養育者 52 名	アンケート
Pugh, 1996	イギリス	里親養育者の子ども 9 名 里親養育者 4 名	インタビュー
Sinclair, Gibbs and Wilson, 2004	イギリス	里親養育者 944 名	19 ヶ月後のフォローアップでのアンケート養育者の定着に関する研究
Sinclair, Wilson and Gibbs, 2005	イギリス	里親養育者 495 名 ソーシャルワーカー 908 名 里子 150 名	アンケート ケーススタディ 措置の研究
Spears and Cross, 2003	イギリス	里親養育者の子ども 20 名	インタビュー
Sutton and Stack, 2013	イギリス	里親養育者の子ども 6 名	インタビュー
Swan, 2002	カナダ	12 回のインタビュー 19 のフォーカスグループ 里親養育者の子ども	インタビュー フォーカスグループ
Twigg, 1994 Twigg, 1995	カナダ	里親養育者の子ども 8 名 8 家族のインタビュー	インタビュー
Walsh and Campbell, 2010	イギリス	里親養育者 14 名 里親養育者の子ども 28 名	アンケート デジタル投票
Watson and Jones, 2002	イギリス	里親養育者の子どもの案内人 6 名 里親養育者の子ども 116 名 アンケート	アンケート
Younes and Harp, 2007	アメリカ	里親養育者 10 名、里親養育者の子ども 16 名	インタビュー

児童サービスプロバイダーである CORE ASSETS 社から資金提供を受けています。

早稲田大学大学院総合研究機構
社会的養育研究所
監訳チーム

担当：中村 豪志（早稲田大学 社会的養育研究所）
2022（令和4）年2月

Supported by  日本 THE NIPPON
財団 FOUNDATION